

## 大学連携で取り組む地域協働学習による情動知能の変化

### Changes in Emotional Intelligence through Community Cooperative Learning in Fukui Academic Alliance

田中 洋一<sup>\*1</sup>, 山川 修<sup>\*2</sup>  
 Yoichi TANAKA<sup>\*1</sup>, Osamu YAMAKAWA<sup>\*2</sup>  
<sup>\*1</sup> 仁愛女子短期大学  
<sup>\*1</sup> Jin-ai Women's College  
<sup>\*2</sup> 福井県立大学  
<sup>\*2</sup> Fukui Prefectural University  
 Email: you@jin-ai.ac.jp

あらまし：福井県の大学が連携して取り組む地域の問題解決のための授業では、エンゲストロームの探求的学習をベースとして、「問いを立てる」ためにデザイン思考、「関係性を創る」ためにリーダーシッププログラムを組み合わせて授業設計を行っている。2021年度授業では、内発的動機づけ尺度の低位尺度である有能感と有能欲求が5%有意で向上した。本稿では、情動知能の尺度である日本語版 WLEIS の変化に関して報告する。

キーワード：大学連携，地域協働学習，デザイン思考，情動知能，内発的動機づけ

#### 1. はじめに

筆者らは、福井県の高等教育機関が連携した FAA（ふくいアカデミックアライアンス）科目として、福井県立大学「地域社会とフィールドワーク A：地域課題にデザイン思考で取り組む」（以下、本科目と記す）を開講・運営している。本科目では、エンゲストロームの探求的学習をベースとして、「問いを立てる」ためにデザイン思考、「関係性を創る」ためにリーダーシッププログラムを組み合わせて授業設計を行っている。OECD はラーニング・コンパス 2030 において、変革を起こすために目標を設定し行動する能力「エージェンシー」を提唱し、それを発達させる一つとして、社会情動的スキルをあげている。社会情動的スキルは、Goleman がいう EQ（情動知能）の「5つの側面（自己認識、自己統制、意欲、共感、社会的能力）」と重なる点が多い。本稿では、2021年度授業設計及びその評価、特に情動知能の変化に関して報告する。

#### 2. 授業設計

本科目は後期5日間（土曜や日曜等）の集中講義であり、坂井市竹田地区を舞台として PBL（Project Based Learning）を実施した。履修者は4大学23名であり、4チームに分かれて授業に取り組んだ。また、科目「ファシリテーション応用 C」を履修する学生1名がファシリテーターとして参加する。例年との変更点は下記の3点である。①例年1日目に実施していた事前学習（発想法演習、デザイン思考ミニワーク）を PBL に埋め込んだ。②1日目に希望学生は竹田地区の旅館に宿泊する等、1日目から2日目にかけてのフィールドワークを充実させた。③デザイン思考のインストラクションを見直した。

#### 2.1 授業スケジュール

1日目：10/30（土）10:00～17:00

@竹田コミュニティセンター

- オリエンテーション
- チームビルディング（アイスブレイク、リーダーシップ目標設定、質問ワーク）
- 問題提起
- フィールドワーク体験&インタビュー  
①まるそば作り、②竹田伝統料理、③獣害管理現場、④竹田の森林案内
- 振り返り

2日目：10/31（日）10:00～17:00

@竹田コミュニティセンター

- 問題提起の再定義  
「竹田の人々が幸せになるような地域の資源利用の仕組みを考える」
- フィールドワーク散策&ランチ  
①谷口屋（油揚げ）、②鈴廻園（ハーブ）、③溪流（ジビエ）、④千古の家（蕎麦）
- 問題定義、発想法
- 振り返り

3日目：11/14（日）9:30～17:00

@F スクエア（アオッサ）

- 問題定義
- 創造（なぜ、もし、どうしたら）
- プロトタイプ
- テスト
- 振り返り

4日目：11/20（土）9:30～17:00

@F スクエア（アオッサ）

- プロトタイプ+テスト
- 寸劇指導
- 振り返り

5日目：11/27（土）10:00～17:00

@竹田コミュニティセンター

- 寸劇の練習
- 竹田地区の方への寸劇によるプレゼン
- ワールドカフェ
- 振り返り

## 2.2 振り返り

毎回、最後に30分程度の振り返り（SBIフィードバックの共有→URシートの記述）を実施した。SBIフィードバックは、どんな状況（Situation）で、相手のどんな行動（Behavior）が、自分にどのような影響（Impact）を与えているかを、フィードバックするものである。URシートは、ALACTモデル<sup>(1)</sup>を参考として①～④の順に振り返るように設計した<sup>(2)</sup>。

- ① 今日の活動の中で、驚き、興味、不満、不安、違和感、等は感じましたか？
- ② それらの経験から何がわかりますか？  
また、あなたにとって、それはどういう意味を持ちますか？（発見）
- ③ 発見を活かすために、考えられることは何かありますか？
- ④ 次回、変えてみようと思うことはありますか？

## 3. 心理尺度によるプログラム評価

### 3.1 情動知能の分析

本科目1日目終了時と5日目終了時に、情動知能の尺度である日本語版 WLEIS<sup>(3)</sup>を用いて調査した。日本語版 WLEIS は、「自己の情動評価」「他者の情動評価」「情動の利用」「情動の調節」という4つの下位尺度に分かれる。本尺度は16項目を7件法で回答しており、両方に回答した有効回答数は23名である。下位尺度4つとも正規性が認められたため、t検定を用いたところ、「自己の情動評価」「他者の情動評価」「情動の利用」は1%有意で向上した(表1)。

表1 情動知能の分析：平均（標準偏差）

	自己の 情動評価	他者の 情動評価	情動の 利用	情動の 調節
1日目	19.1 (3.93)	19.4 (2.97)	16.7 (4.05)	18.6 (4.27)
5日目	21.4** (4.51)	20.9** (3.23)	18.9** (4.30)	20.0 (4.44)

$n=23$ , \*\* $p<0.01$

### 3.2 内発的動機づけとの相関

自律的学習者の特質として重要な内発的動機づけに関する理論に自己決定理論がある。本研究では、有能感、有能欲求、自己決定感、自己決定欲求に関する大学生用の尺度「自己決定とコンピテンスに関

する大学生用尺度」<sup>(4)</sup>を用いて、本科目前後の内発的動機づけを測定した結果、有能感及び有能欲求が5%有意で向上し、自己決定感及び自己決定欲求は有意差がなかった<sup>(5)</sup>。5日目終了時における情動知能「自己の情動評価」「他者の情動評価」「情動の利用」「情動の調節」と、内発的動機づけ「有能感」「有能欲求」「自己決定感」「自己決定欲求」の相関を分析した結果、自己決定感は、「情動の利用」と1%有意、「情動の調節」と5%有意で相関があった(表2)。

表2 情動知能と内発的動機づけの相関

	自己情動評価	他者情動評価	情動の利用	情動の調節	有能感	有能欲求	自己決定感	自己決定欲求
自己情動評価	-	0.28	0.17	0.46*	-0.12	0.05	0.08	0.17
他者情動評価	0.28	-	0.30	0.17	-0.25	0.38	-0.03	0.22
情動利用	0.17	0.30	-	0.44*	0.39	0.08	0.61**	0.34
情動調節	0.46*	0.17	0.44*	-	0.28	-0.16	0.42*	0.22
有能感	-0.12	-0.25	0.39	0.28	-	0.29	0.49*	0.21
有能欲求	0.05	0.38	0.08	-0.16	0.03	-	0.11	0.48*
自己決定感	0.08	-0.03	0.61**	0.42*	0.49*	0.11	-	0.63**
自己決定欲求	0.17	0.22	0.34	0.22	0.21	0.48*	0.63**	-

$n=23$ , \*5%有意, \*\*1%有意

## 4. おわりに

2021年度の授業設計に対する各教員の主観的評価は、上手くいったという意見が多かった。今後、他の心理尺度やURシートを分析し、学習効果を明らかにしていきたい。

## 謝辞

本科目は、福井県立大学の石丸香苗氏、仁愛大学の江南健志氏、福井高専の長水壽寛氏と共に運営した。特に、石丸氏には竹田地区とのコーディネートに尽力いただいた。本研究は、JSPS 科研費 JP 19K03100, 20H01727, 21K18516 の助成を受けた。

## 参考文献

- (1) コルトハーヘン：“教師教育学”，学文社，東京（2010）
- (2) 田中洋一ほか：“ディープ・アクティブのための問いと関係性のデザインと実践Ⅱ”，日本教育工学会研究報告集，17(1)，pp.709-714（2017）
- (3) 豊田弘司ほか：“日本版 WLEIS（Wong and Law Emotional Intelligence Scale）の作成”，奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要，20巻，pp.7-12（2011）
- (4) 桜井茂男：“自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度”，奈良教育大学教育研究所紀要，Vol.29 pp.203-208（1993）
- (5) 田中洋一，山川修：“大学連携で取組む地域の問題解決のための授業設計と評価”，日本教育工学会研究報告集，2022巻1号【掲載予定】（2022）